

越谷市文化連盟

平成15年度

『こしがや文化芸術祭』

平成16年2月22日(日) 11:00~17:00

越谷市郷土研究会 展示部門出品紹介

於 越谷コミュニティセンター ボルティコホール

『甲府で新発見・

卯之助の力石《文珠の石》』 高崎 力

『長島村の絵地図』

谷岡隆夫

『増森本田の肥船』

加藤幸一

1. 甲府で新発見・

卯之助の力石『文珠の石』

高崎 力

三ノ宮卯之助は、越谷市三野宮の出身者で、文化四年（一八〇七）に生まれ、嘉永七年（二八五四）に没している。江戸力持ちの有力者の一人で、彼の力石は、越谷周辺は勿論のこと、信州諏訪から大阪、遠くは姫路まで散在している。その確認数は、新発見の「文珠の石」を含めて三十六個に及んでいる。これは日本一の多さである。

平成十五年八月、甲府市の稲積神社にある通称『文珠の石』が卯之助のものと確認された。それには、

「百才貫、嘉永二年、三ノ宮卯之助、岩附長□□、同七□、同馬□、鷲ノ宮徳治□」
と刻字されている。嘉永二年は、彼が江戸力持番付表で東方の大関（最高位）に昇進した翌年であり、他の四名は卯之助の仲間である。江戸時代後期の甲府では、「連寺・信立寺・稲積神社などの境内地で、大相撲・芝居・見世物などの興行が盛んであった。

『文珠の石』とは、「三人寄れば文珠の知恵」といわれるように、力持ちが三人ぐらい組んで、力石を巧妙に持ち回して曲持ち（曲芸）を行い、観衆を喜ばせたことから名付けられたものである。

この力石は、いつしか世相を反映して、現在では受験や恋愛・病氣などの願い事の対象となり、「この石の上に手をのせ、願い事を述べて三回まわれば、願いが叶えられる」といわれ、受験生や病弱者や若者の間で、信仰の対象となってしまった。



2. 長島村の絵地図

公岡隆夫

越谷市長島二九〇―一の内山家が所有する古地図である。内山家は江戸時代に代々名主を勤めた家柄であり、古地図を含め、膨大な古文書を所蔵している。

《天保七年の松松地図》

江戸時代の新編武蔵風土記稿によると、長島村には、「満蔵院」と呼ばれる寺院と村の鎮守である「稻荷神社」とがあるという。

ここにあげた絵地図には「寺」の文字と神社の記号が書かれていて、寺院と神社の存在が裏付けられる。寺院は満蔵院と呼ばれ、明治初年の廃仏毀釈により廃寺となり、名残が全くなくなる。稻荷神社は、平成十年四月、ここから三ツ木家（長島二一八）の道路の反対側の五才新田と呼ばれた地に移転される。また高札場があったこともわかる。現在もその場所を「高札場」と呼んでいる。さらに内山家には、屋敷の回りを巡る囲い堀があったこともわかる。

地図中に、太郎右衛門堀という堀の名が見られる。これは名主であった内山太郎右衛門の名からとったものである。さらに東側には末田、小曾川、砂原方面から流れてくる末田用水がある。途中から出羽堀が分流している。また、末田用水の下流は、悪水落としとなっている。この悪水落としては、後に「新川」となる。

《年代不詳の松松地図》

この絵地図は、江戸末期のものと推定できる。

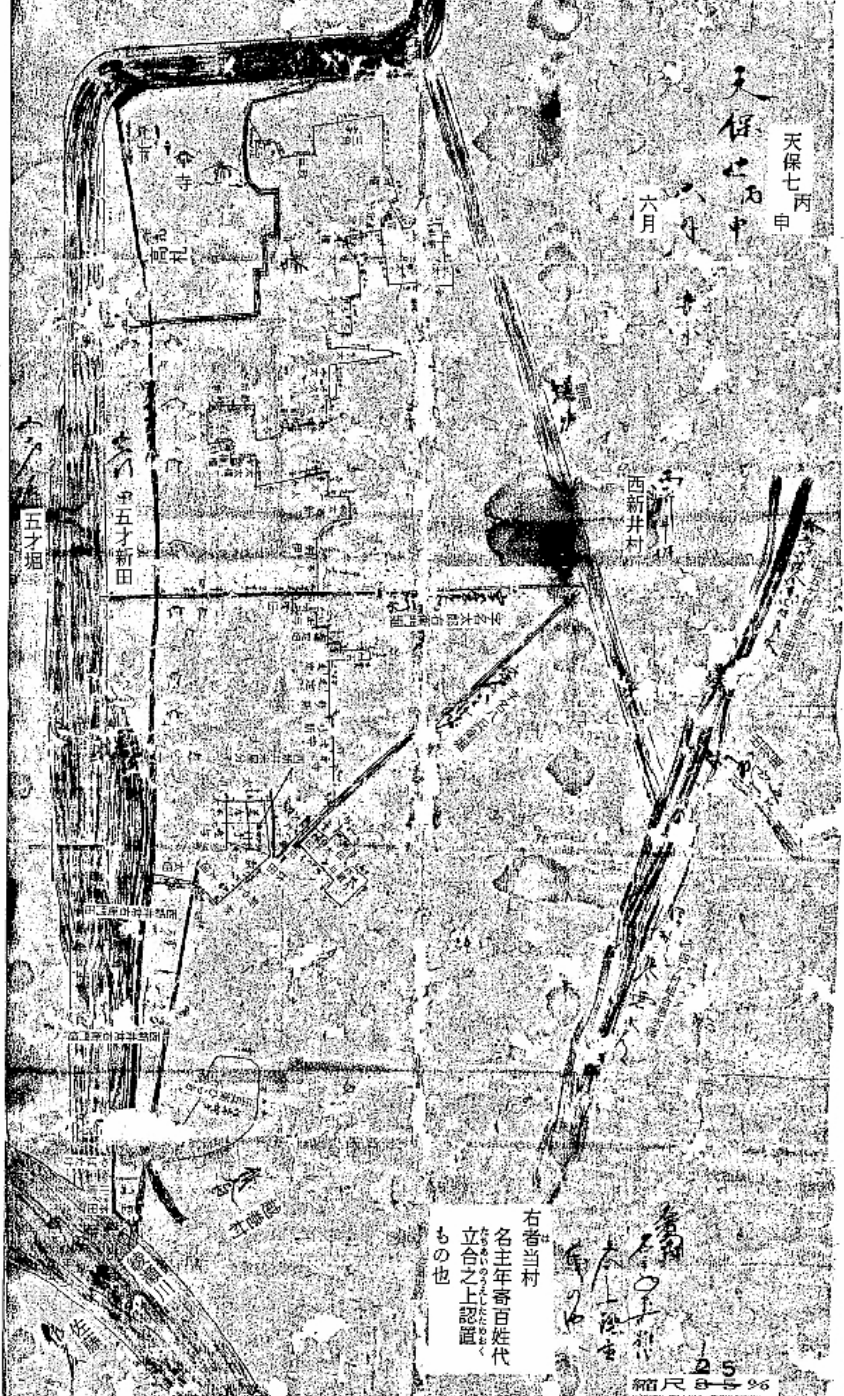
囲い堀で囲まれた内山家の敷地内に、寺の裏側を流れる堀がさらに見られる。現在この堀の北側一帯を「寺裏」と呼んでいる。かつてそばに寺院があった名残である。

この地図では、末田用水の途中から出羽堀が分かれ、さらに末田用水の下流が「新川」となっていることがわかる。新川は、天保七年の絵地図では、四ヶ村悪水落としとなっていたものである。この悪水落としを改修してできたものが新川なのであろう。

また、五才堀に沿って五才堀からの洪水を防ぐために囲い土手が見られる。現在でもその囲い土手の名残がある。

以上の二枚の絵地図は、長島村の寺院の存在や新川の生い立ちがわかる、とても貴重な文化財といえる。

天保七丙
申
六月



西新井村

五才新田

五才堀

右者当村
名主年寄百姓代
立合之上認圖
もの也

縮尺 1/5000

3. 増森本田の肥船

加藤 幸一

増森本田地域は、かつては他の周辺地域と同様にもちし、粟(あわ)、大豆、麦などの雑穀を栽培し、自給自足の生活をしていた。

増森本田の東側を流れる古利根川は、大正十二年頃に新川ができると流れが緩やかになり、盛んであった晒し業も昭和十年頃は廃れた。代わって縄、菰(こ)などの薬工品作りで生計を立てた。それとともに田の肥料としては、東京から下肥(ご)を使用するようになる。この下肥を運んだのが肥船(ご)である。戦後の昭和二十四・五年頃まで続いたと云うだ。

肥船は古利根川と庄内古川の合流地点の下流の新川右岸に接岸された。そして船頭が一人乗った空の肥船が引き潮の時に潮にのって下流に向けて出発する。新川を渡って中川を下り、潮止橋の先の中川右岸の花畑(はなばた)運河まで来る。そこで中川と綾瀬川の満潮時に運河に入り、運河を渡って綾瀬川に入る。綾瀬川を下り、小菅刑務所(現在の東京拘置所)の脇を通り、堀切橋あたりの水門(綾瀬水門)をくぐって荒川放水路を横断し、さらに川幅が狭い綾瀬川(足立区と墨田区の区境を流れる)に入り、鐘ヶ淵のところまで隅田川に出る。ここは船にとって水難事故が起きやすい難所である。それから、隅田川を上って、千住大橋の約二百メートル先の右岸の船着き場に到着する。その場所は、釣り舟宿などを手広く経営している豊島(ご)家そばにあった。到着するのは出発した日の翌日である。

増森本田には、四・五十軒の農家があり、全体を二つに分けて交替で千住大橋のそばの南千住の船着き場まで出掛けるのである。夜が明けぬ五時頃に十五人から二十人くらいの集団が出発する。昭和二十二・三年頃は、自転車が二台前後に並んでロープで結び、さらにその後ろに空の肥桶(こえおけ)六本を積んだリヤカーに連結されて、自転車、自転車リヤカーとそれぞれ一列に並び、それが八組から十組位できている。国道四号線を通って南千住の船着き場につくのは七時頃である。約二時間かかる。

昭和二十二・三年以降は、戦闘機の大きなタイヤ(大きさは今の軽自動車の程度で、太さはもっと太かった)を利用して大きなリヤカーを四台作り、船着き場そばの豊島家に預けるようになった。夜が明けぬ頃に自宅を自転車で出発し、越谷駅で東武鉄道を利用して北千住駅で降り、そこから徒歩で豊島家まで行くのである。

南千住の船着き場に到着すると、国道四号線の西側の南千住あたりの民家を手分けして一軒一軒のトイレから人糞を汲み上げ、肥桶を一杯にして肥桶六本をリヤカーに積み、船着き場の肥船と往復を繰り返すのである。後に大きなリヤカーを使うようになった時は、十二本を積んだ。昼食を挟んで午後三時から四時位までかけて肥船を満杯にする。

帰りは、見張り役一人を残して増森本田に夜になって帰ってくる。見張り役は船頭と一緒に肥船に乗り、きちんと下肥を送られるかを監視するのである。よく戸ヶ崎あたりで、地元の人(農家の)にこっそりと下肥を売り、その減った分だけ水を入れるという不正を防ぐためである。後には見張り役は二人に増える。それは、船頭と見張り役が組んでの不正防止は勿論、早く到着するようにと船頭の船の運航を助けるためであった。

肥船が次の日に彦成(現在の八潮市)あたりにくると、見張り役の一人が増森本田に応援を呼びに行く。呼ばれた応援の人たちは、地元の言葉で「船迎(ふねむけ)」と呼んで船を迎えに行った。そしてここからが大変である。下肥を満杯に積んだ肥船をみんなで協力してロープで曳(ひ)いて(いわゆる「曳舟」)出発地点の岸にもどってくるのである。なお肥船は、吉川橋の上流二三百メートルの吉川側にある「肥又(こえまた)」(屋号)がかかわっていた。また、増森の三丁野の人々も空の肥船で千間堀の新田橋のたもとから出発したという。

(平成十五年二月、増森本田の小島康男氏(昭和二年の生まれ)からの聞き取り調査)

越谷市郷土研究会に入ってみませんか！

越谷市郷土研究会とは

- ◎史跡めぐりなどのイベントを毎月実施し、また、毎年、越谷市民まつり・越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しております。
- ◎当会は、昭和四〇年（一九六五）三月に発足しました。以後地道に活動し、現在は会員数が三〇〇名程の大所帯となりました。ほぼ毎月行われる史跡めぐりは三二五回を数えるまでになりました。
- ◎平成十六年一月十四日（土）に

『NPO法人・越谷市郷土研究会』の設立総会を開きました。

- ◎当会の平成十五年以降の主なイベントをあげますと次のとおりです。

- 平成十五年一月三日（金） 恒例の七福神めぐり（北千住方面）
- 平成十五年一月二六日（日） 研究発表会「越谷周辺の諸巡礼」
- 平成十五年七月十一日（金） バス史跡巡り「関東の古城と千姫の弘経寺」
- 平成十五年八月十八日（月） 越谷市内、大道遺跡第2次発掘の見学会
- 平成十五年八月二四日（日） 記念歴史講演会「力石と力持ち」

主催は、越谷市教育委員会と越谷市郷土研究会（当会）です。

- 平成十五年九月二八日（日） 出羽地区の石仏めぐり
- 平成十五年十月十九日（日） 川柳地区の半日史跡めぐり
- 平成十五年十一月四日（火） 雁坂峠を巡って恵林寺を訪ねるバスツアー
- 平成十五年十一月九日（日） 県立博物館特別展「平林寺」団体鑑賞
- 平成十五年十一月十六日（日） 僧堂百年目の秋に平林寺を訪ねる
- 平成十五年十二月二日（日） 新撰組を日野・調布に訪ねる
- 平成十六年一月三日（土） 恒例の七福神めぐり（深川方面）
- 平成十六年二月二九日（日） 江ノ島方面（江ノ島神社、七里ヶ浜、卯之助力石）

- ◎会報「古志賀谷」の隔年の発行（B5版、百十〜百五十頁程度）及び無料配布

内容は主に会員による郷土の調査・研究の報告や随想の寄稿文などです。

※なお、以上の他に、越谷市社会福祉協議会への寄付活動なども行ってきました。

郷土研究会にお入りになりますと

- ◎すべてのイベントの案内が受け取れます。
- ◎せっかくよい行事があったのに知らなかった、ということがありません。
- ◎会員だけのための特別行事に参加できます。
- ◎郷土研究会の会員限定イベント、例えばバス史跡めぐり等にも参加できます。

郷土研究会にお入りになるには

- ◎会費は、年間二千元（四月〜翌年三月、会報・諸案内状・諸会議費等）です。どなたでも気楽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。
- ◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・電話番号をご記入し、下記までお寄せ下さい。
- または、当会の各種行事の際に、郷土研究会役員までお申し込み下さい。

〒343-0806 越谷市 宮本町 三一一七七八 谷岡隆夫方

越谷市郷土研究会 九〇〇

電話 〇四八一九六一七五二七